■研究発表論文

福岡県八女市・うきは市における在来茶園の面積の変遷と現況に関する基礎的研究

A Fundamental Study on the changes in the Area of Traditional Tea Plantations in Yame and Ukiha Cities, Fukuoka Prefecture

佐々木　一成*　　朝廣　和夫**　　崔　継瀟***

Kazushige SASAKI　Kazuo ASAHIRO　Jixiao CUI

Abstract: The object of this study is to investigate the changes and a present situation in the area of traditional tea plantations in Yame and Ukiha cities, Fukuoka prefecture. Square measure of the tea plantation and present situation of the survival situations of traditional tea plantations, were grasped by the interview to division of the tea farming of J.A. According to the results of a questionnaire on the tea farming to the tea farmers in Yame area those were grasped that about 1970 the extension of the tea plantation was big and the square of the traditional green tea is farmed 21.4% of the tea farm in Yame area and 80.0% of the traditional tea farm is not exceeding 1a it is feared that after this the farming of the traditional green tea plantations have been on the decline. To conserve the traditional tea farming and to develop the tea industry on a mountainous area. It is important to research the situation of the traditional green tea and to add the other values on the tea and tea farming.

Keywords: *landscape of tea farm, native tea, mountainous area*
キーワード：茶景観，在来茶園，中山間地域

１．はじめに

日本における元来の茶生産は中山間地域で行われる労働集約型の農業であった。現在の中山間地域は少子高齢化のため，労働力が不足している。茶園は平坦地で拡大する傾向にあり，機械化，規模拡大が進み，中山間地域における茶生産の競争力は厳しくなりつつある。

鳥尾屋ら（1996 年）によると茶の品種は，在来種実生茶園から栄養系品種茶園への転換が始まり，特に「ヤブキタ」という品種が,1970 年代から 20 年間に激増した。現在，栽培されている茶の品種の 8 割を占めている。このような栄養系品種の増大は，商品としての品種の多様性や機械化に即した高い生産量と収穫高をもたらした。一方，摘採期の集中化に伴う炭疽病などの病害虫による収量と品質の低下の懸念が指摘されている [1]。在来種の特性は他の品種よりも，耐凍性，炭疽病抵抗と茶の品質が明らかに優れると指摘されている [2]。低地よりも労働生産性の低い中山間地における茶生産において，栄養系品種による収益性の向上が重要である。しかしながら，中国伝来から約 700 年にわたり傾斜地で栽培されてきた在来茶の存在は，機械化により失われてきた伝統的な茶栽培の技術と同様，その景観，品種の保護・保全が重要な課題であると考えられる。

荒井ら（2010 年）は，近代以前に形成された全国 25 か所の茶産業を類型化し，発祥要因，江戸時代までの茶産業形成過程を明らかにした。寺院を期限とする八女茶の発祥要因と当時の景観構造が示され，[4] 楊真ら（2015 年）の研究結果を加味すると八女茶の景観構造はおそらく変化してきたと考えられる。[5] 次に，傾斜地のＶ字谷の底部における茶園について木村ら（2012 年）は滋賀県東近江市奥永源寺地域における茶園が集落の川沿い，林縁，家屋の間に，小規模で，南向きの緩斜地を中心に分布していることを明らかにした。[6]

本研究は，在来茶の保全という問題意識に立ち，福岡県八女市・うきは市を対象に在来茶生産の変遷および現在の概況を明らかにすることを目的とした。

室町時代に福岡県で発祥した八女茶は，栄林周瑞禅師により境内および寺院周辺に諸種し，農家に栽培などを伝授したと伝えられている。近年，八女茶の生産は栄養系品種へ転換が進む。一方，伝承された在来種は収益性が低いため改植が続き，在来茶固有の景観，文化，遺伝子の消失が危惧される。地域レベルでの保全が必要と考える。

２．研究方法

（１）1925 年以降の茶栽培の変化

図－1　八女市黒木町田本・笠原・うきは市の楠森堂の位置図

１）統計資料に見る変化

戦後以降の茶栽培の変化概要を知るために，1925 年～1993 年の期間における旧八女郡茶園面積に関するデータを整理する [3]。

*西日本短期大学緑地環境学科　　**九州大学芸術工学研究院　　***株式会社リファレンス

なお，1925 年～1964 年は茶園面積，1966～1993 年は摘採面積を用いる。

具体的な 1950 年代と現在の農家の茶園の所有形態，また，在来茶と栄養系品種の所有の状況を把握するため，八女市黒木町の田原を用いる。表－1 に示すが，栄養系品種の所有が多いのがわかる。

この図－2 により，茶園面積，1966～1993 年は摘採面積を用いている。茶園面積は 1926 年から戦前の茶園面積に関するデータがないが，1940 年～1958 年の間に旧八女郡の茶園面積は減少した傾向があったと想定される。1967 年から旧八女郡の摘採茶園面積が激増していき，1988 年に 903ha とピークとなった。その後，

写真－1　調査対象地（うきは市楠森堂）

1988 年からは 903ha と一定している。福岡県における茶栽培面積の変遷を比べると，旧八女郡の茶面積の変遷の傾向はほぼ同じくと見える。「茶園面積」は，面積全体をいい，「摘採面積」とは，茶を栽培している面積のうち，収穫を目的として茶葉の摘取りが行われた面積をいう。

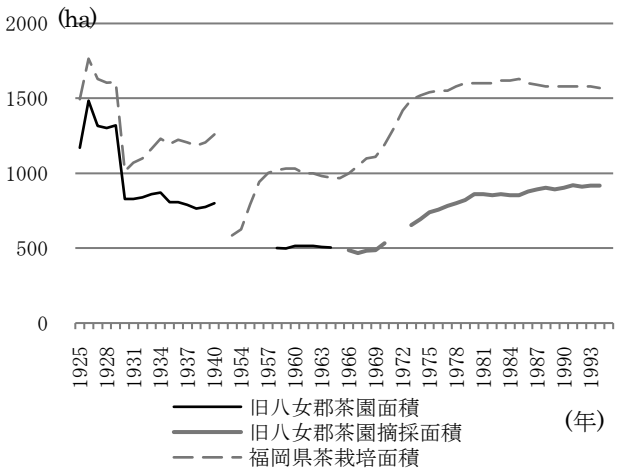
2）全世帯アンケート等による在来茶園の残存状況の把握

具体的な 1950 年だと現在の農家の茶園の所有の面積の形態，また，在来茶と栄養系品種それぞれの所有面積の状況を把握するため,八女市黒木町の田本地区と笠原地区を対象に全世帯アンケート調査を 2017 年 3 月に実施した。配布・回収方法は 2017 年 3 月 28 日の区長会で各区長に依頼し，区長が各区の各世帯に配布し，4 月 15 日まで返信封筒で回収した。田本地域の全世帯（総数 102 世帯）と笠原の全世帯（総数 314 世帯），合わせて 416 世帯に配布した。108 世帯（2 世帯無効）を回収し回収率は 26%であった。調査内容は，現在または 1950 年～1960 年における茶園の所有の有無，栄養系品種である「ヤブキタ」と在来茶種のそれぞれの所有面積，　および回答者の属性とした。なお，アンケート調査でヒアリング調査への協力の了承が得られた 6 軒について，2017 年 9 月 27，28 日に世帯を訪ね在来茶園の残存状況の確認，および茶園の育成方法，残した理由などについてヒアリング調査を実施した。在来茶と栄養系品種の所有面積の差異の把握について，統計情報はなく，空中写真では葉の色や形で在来茶か栄養系品種なのかわからない事が予想されるため，聞き取り調査とした。

（2）八女市・うきは市における近年の品種別栽培面積調査

近年の茶栽培の面積については，八女地域における在来種生産概要を 2019 年 11 月 12 日に八女市に所在する全農ふくれん茶取引きセンター茶業課担当者に在来茶の残存状況等について聞き取り調査を行った。

うきは市については，浮羽町山北の国指定登録有形文化財「楠森河北家」である楠森堂茶園を対象とした。河北家は浮羽の地で 800 年間 27 代続く旧家で，この茶園は約 200 年前の江戸末期から始まり，樹齢が 80 年から数十年の国内でわずかに現存する在来茶の古樹がある（写－1）。うきは市における在来茶生産は楠森堂のみ



図－2　1925 年～1993 年の期間における旧八女郡と福岡県の茶園面積（ha）[3]：旧八女郡の 1941～1957 年，1965 年，1971 年，1972 年にデータがなし；福岡県の 1941～1952 年にデータがなし。

であることから，2019 年 4 月 19 日に 27 代当主河北氏に聞き取り調査を実施した。

（3）八女市の在来茶生産農家へのアンケート調査

ＪＡふくおか八女茶業課の協力を得て，茶業委員会において，アンケート調査を実施した。対象は，在来茶園を生産するすべての生産農家 61 軒とし，アンケートを 2019 年 12 月 21 日に送付し，2020 年 2 月末までに 19 軒から回収した（回収率 31%）。

内容は，氏名・性別・年齢・行政区・農家種類・面積・後継者問題・将来の営農継続年見込み・在来茶とヤブキタの特徴などである。

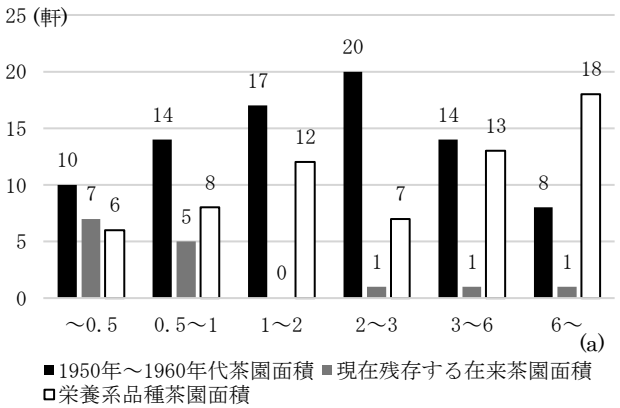
３．調査結果

（1）戦後における茶栽培面積について

1）福岡県と八女郡の変化

1925 年～1993 年の期間における旧八女郡の茶園面積を図－2 に示す。この図を見ると茶園面積は 1925 年から 1939 年まで，1,484ha から 800ha まで激減した。第二次世界大戦期間及び戦後 13 年間の茶園面積データは入手できなかったが，1940 年～1958 年の間に旧八女郡の茶園面積は，約 300ha 程度，減少した傾向があったと想定される。

1967 年からは摘採茶園面積のデータであるが，面積が増加し，1988 年に 903ha に達した。その後，1988 年からは概ね 900ha 程度で一定している。



図－3　田本・笠原地区における 1950 年代の茶園面積と 2017 年の在来茶園・栄養系品種茶園の面積

福岡県における茶栽培面積の変遷と比べると，旧八女郡の茶園面積の変遷と傾向がほぼ同様で，1970 年前後の面積拡大が大きいことが確認された。これは，茶園の拡大，機械化，そして栄養系品種の増加という茶産業の発達・拡大によるものである。

２）八女市黒木町の田本・笠原地区におけるアンケート調査結果

全体の結果として，「現在，茶園を所有しています」と回答したのは 70 軒（65%），「過去，茶園を所有していました」は 21 軒（20%），「現在も過去も，所有していません」は 16 軒（15%）であった。但し，未回答者は茶園を所有していない可能性が高いと考えられ，「現在も過去も，所有していません」の割合はより高いと想定される。現在，茶園を所有している 70 軒のうち，在来茶園のみを所有しているのは 5 軒（7%），栄養系品種茶園のみを所有しているのは 55 軒(79%)，両方とも所有しているのは 10 軒(14%)であった。茶園の所有面積について図－3 に示す。1950～1960 年代における農家所有の茶園面積について，最も多いのは 2～3a で 20 軒であった。グラフは左右にすそ野を引いており，面積の所有は大小あったようである。2017 年の栄養系品種茶園は 6a 以上が 18 軒と最も多く，次に，3～6a が 13 軒，1～2a が 12 軒ともう一つの山があった。これは，1950 年代より茶園面積の大規模化を行った農家が主流である一方，昔と概ね変わらない面積で営農を継続している農家があることが示唆された。在来茶園について，在来茶園を所有している 15 軒のうち，面積 0.5a 以下が 7 軒と最も多く，続いて 0.5～1a が 5 軒，1a 以上が 3 軒という結果であった。以上のことから，在来茶園面積の残存状況は本地域において 21.4%（70 軒のうち 15 軒）の農家が所有するのみとなり，その所有者の所有面積の割合も 1a 以下が 80%であり，わずかに残されている実情が明らかとなった。

在来茶園を所有する 6 軒の農家へのヒアリング調査の結果について述べる。在来茶園の育成方法について，「実生苗から育成した」が 4 軒，「山から実を取って植えた」が 2 軒である。在来茶園を残した理由は，「立地が悪いから」が 4 軒，「自分が飲みたいから」が 1 軒，「味が優しく，特徴があるから」が 1 軒であった。2 軒は在来茶園を放棄しており，摘採している農家は 4 軒あった。そのうち 1 軒が自家用，1 軒が小売り，2 軒が農協や茶工場に販売していた。今後の予定について，「そのままにする」が 4 軒，「品種を切り替える」が 1 軒，「辞めたい」が 1 軒であった。また，ヒアリングでは，1950 年代以降，茶工場ができるまでは，小規模生産で，集落周辺の小規模園の他，畑や果樹園の周りに茶の木を植えて収穫したり，山手では，人工林を伐った後の木庭作や，山に茶の実を蒔いて収穫したとの話も得ることができた。現地で在来茶園の立地を確認したところ，摘採されている茶園は列状に刈り込まれ，立地は傾斜度 11～35 度以上に分布していた。近年の茶園の立地の傾向が 1 ～25 度であることと比較すると，より傾斜の急な場所に残されている。これは，現在の機械で収穫する営農方法に不適な立地であるため，栄養系品種への切り換えが成されず，在来茶が残されたこと想定され，平坦地の在来茶園は，1950 年以降，機械化により栄養系品種への改植が順次行われてきた。傾斜度のきつい在来茶については，改植が遅れた。これら部分的に残された傾斜他の在来茶園では機械化が進むものの，出荷に至るのは八女地域で 61 農家に留まり，その他の農家用として消費されるか，摘採されずに放棄されている現状であることが示唆された。水稲や畑作に適さない場所で栽培される傾向があったことから，現在よりも比較的傾斜の急な立地や残余地で栽培がおこなわれ，災害時の土留めの役割もあったと推察される。在来茶は実生で直根のため災害時にも強いと想定され，今後の研究課題と考えられた。なお，ヒアリングの中に，茶園を「ぼこぼこ茶園」，「とんぼどんぼ茶園」と表現されることがあった。茶園の周りに籠と円座で丸くなり，摘める所から手摘みで収穫されたからである。当時の茶園の風景が残されている。

（２）八女市・うきは市における品種別栽培面積について

表－1 は，2018 年～2019 年度の全農ふくれん茶取引センターに上場されている品種と面積のリストである。茶センターでは品種名明記での上場が義務づけされているが，中には「合葉」で上場されている場合もあるとのことである。八女市内における茶の栽培面積は 12,3575a であった。その内，最も多いのはヤブキタで 87,881a(71%)であり，続いてサエミドリが 7,601a(6%)，オクミドリが 5,634a(5%)であり，八女市ではヤブキタの生産量が 7 割を占めた。在来茶は 675a（1%）であり，表からは多くの少量生産品種が確認され，在来茶もそのような位置づけの 1 つであると想定された。在来茶生産農家において，煎茶が 3 軒，かぶせ茶が 7 軒，玉露が 2 軒であり，上場量は，2019 年度産で 880Kg であった。

楠森堂茶園は，1960 年に 12ha の茶園を有していたが，現在は，5ha に減少している。減少理由としては，久留米市への交通網が良くなり就職先が増えたことが挙げられ，茶園を維持管理する人材が不足したためとういことであった。

（３）八女市の在来茶生産農家へのアンケート調査

八女市における在来茶園生産農家 61 軒へのアンケート結果について述べる。「ヤブキタ」を栄養系品種の代表として取り上げ，

表－1　2018 年度八女市における全農ふくれん茶取引センターに上場されている品種・面積リスト
（出典：全農ふくれん茶取引センターより提供）

品種	面積(a)	割合	品種	面積(a)	割合	品種	面積(a)	割合	品種	面積(a)	割合
ヤブキタ	87,881	71%	オクヒカリ	470	0%	ベニフウキ	20	0%	ソウフウ	15	0%
カナヤミドリ	3,444	3%	ユタカミドリ	241	0%	シュンメイ	3	0%	ハルミドリ	55	0%
オクミドリ	5,634	5%	アサツユ	237	0%	クラサワ	0	0%	合計	123,575	100%
サエミドリ	7,601	6%	メイリョク	444	0%	ロクロウ	18	0%			
ヤマカイ	1,535	1%	ヒメミドリ	95	0%	スルガワセ	0	0%			
サヤマカオ	2,614	2%	ヤマノイブキ	170	0%	タマミドリ	0	0%			
在来	675	1%	ヤエホ	10	0%	コマカゲ	0	0%			
オクユタカ	3,324	3%	フウシュン	13	0%	サキミドリ	120	0%			
ゴコウ	1,409	1%	不明	1,211	1%	ヤマナミ	0	0%	面積 0(a)2018 年度に栽培なし。		
サミドリ	1,016	1%	ツユヒカリ	2,649	2%	サエアカリ	490	0%			
オオイワセ	909	1%	Z1	83	0%	キラリ31	519	0%			
サヤマミドリ	475	0%	フジミドリ	112	0%	セイメイ	7	0%			

他の品種については本研究では詳細に取り扱わないこととした。性別はすべて男性で，年齢は 40 歳 1 人(5%)，50 歳 4 人(21%)，60 歳 7 人(36%)，70 歳 5 人(26%)，80 歳 2 人(10%)であった。農業種類では，兼業 7 人(36%)，専業 8 人(42%)，無回答 3 人(15%)で，後継者については，あり 3 人(15%)，無し 15 人(78%)であった。さらに，5 年後，10 年後の継続意思について，5 年後も続けたいが 8 人(42%)，続けない 8 人(42%)，無回答 1 人(5%)，10 年後も続けたい 3 人(15%)，続けない 8 人(42%)，無回答 2 人(10%)となった。以上の結果より，主生産者の年齢が 60 代(36%)であり，後継者無しが 78%，5 年後の継続意思のある農家が 42%，10 年後は 15%という結果を鑑みると，後継者の問題が深刻であり在来茶園のさらなる減少が将来的に進行すると考えられた。

続いて，在来茶とヤブキタの品種の特徴について自由回答で尋ねた。代表的な内容を表－2 に示す。

表－2　八女市における在来茶生産農家へのアンケート調査について

質問内容	在来茶	ヤブキタ
味について	・おとなしい。 ・味・香ともヤブキタより良い。	・しぶみの有る茶はきびしい。 ・在来茶に比べると落ちる。
伝統を感じるか	・感じたことはない。雑種なので。 ・昔の思い出が残る。	・感じたことがない。 ・在来と比べると落ちる。
栽培優位性について	・天気に左右されにくい，比較的病気が出にくく，虫も少ない。	・病気が出やすいし，虫もつきやすい。
今後の栽培発展性について	・収益が低いので難しい。 ・今の現状では在来は無くなる。	・記述無し。
商品価値について	・時代に合っていない。 ・飲み茶です。	・おとなしい。

以上のことから，在来茶はヤブキタに比べ，比較的，味に優位性があり，天候や虫に強いと生産者が評価している。一方，伝統については，あまり感じられておらず，自家用として飲み継がれてきた面も示唆された。

最後に，在来茶の保全に伴う阻害要因，および，今後の保全に必要なことを自由記述式で尋ね，下記に代表的なものを表－3に示す。

表－3　在来茶の保全に関する自由記述について

質問内容	回　答
在来茶の生産について	・在来品種はふぞろい，目立ちがふぞろい。(機械での摘採が困難) ・摘み手間がかかる。 ・山間部は，草切りなどが大変。
在来茶の品質について	・在来の玉露は最高に良い。 ・在来は生葉の量が少ないが色が良して味がなめらか，人によっては好む人がある。在来は野生がいっぱい有るので良い物を選抜するとよい品種が生まれる。
在来茶の販売について	・販売ルート等を持ってないと一般のJA出荷では，ほかの品種等には立ち打ち出来ない。消費者には分かってもらえる販売ルートの確立。 ・3年位前迄、在来茶を10a位栽培していましたが，製品を農協に出荷した場合，品種名の茶の方が，外観が良い為，価格が高いので，在来種が少なくなったと思う。在来茶は味や香りは良いので，価格が高くなれば，面積も増える。 ・在来のお茶を後世に残すためには，商品価値を高め，希少性を訴えなければ。在来茶園の保全は難しい。

なお，うきは市については，河北楠森堂茶園の 1 軒のみが在来茶を栽培していることから，アンケート調査は実施しなかった。27 代当主河北宣正氏によると，21 代当主の太郎衛門永重がうきは市浮羽町山北地区にある大野原台地で茶栽培を始めたとのことである。この台地は約 9 万年前，阿蘇山の大噴火の際に発生した大火砕流によって形成されたもので，火山灰土壌で酸性の性質を持っている。このため，農産物が育ちにくいことから，21 代当主の太郎衛門永重が，酸性質の土でも育つ茶を栽培し，住民と一緒に台地を切り拓く等，高台で水もなく生活に苦労していたこの地域の住民のために産業を創り出すことが目的と伝えられている。数千種の茶葉が混ざり合っていて，生産に手間がかかり，収穫量，収益はかなり劣ることがわかった。

4．まとめ

今回は，八女市・うきは市における出荷実績を有する生産農家の状況について調査し以下のことが明らかになった。

・福岡県における茶栽培面積の変遷について，福岡県域と旧八女郡の茶園面積の変遷の傾向は，ほぼ同様で，1970 年前後の面積拡大が大きいことが確認され，1988 年からは概ね 900ha 程度で一定していた。

・八女市黒木町田本・笠原地域における茶園面積について，1950 年代は 2~3a が最も多く，2017 年は 6a 以上であった。2017 年における在来茶園面積の残存状況は 21.4%（70 軒のうち 15 軒）の農家が所有するのみであり，その所有面積も 1a 以下が 80.0%であり，わずかに残されている実情が把握された。

・八女市域における在来茶の栽培面積は 675a（1%）であることが確認できた。

・在来茶の生産農家の栽培に対する意識について，時代に合っていないが，在来茶を後世に残すためには，商品価値を高め，希少性を訴えなければいけないと考えられ，在来茶園の保全は難しいと考えられる。天気に左右されにくい，比較的病気が出にくく，虫も少ない等の利用状況を明らかにした。

・残存する在来茶の立地について出荷している農家がある中，過去に育ててきた傾斜の急な立地の在来茶が残されている状況が示唆された。

・文化財指定されている楠森堂においても労働力不足による減産の状況であることを示し，聞き取り調査で，戦後の高度経済成長期になると，多くの人が外に働きに出始め，さらに農作物全般の品種改良や栽培技術が進むことで収穫時期に変化が生まれ，手の空く時期にお茶の生産に携わるという形態が続けられなくなった。また，茶の試験場・研究機関が鹿児島県や八女市に新設され，人材が流出した。他の生産地では品種化や設備の近代化が急速に進むなか，従業員の高齢化や後継者の問題もあったことから，楠森堂は品種化や設備の更新も行われないまま縮小の一途をたどった。

今後については，十数年で八女地域の在来茶生産はさらに減少することが懸念される。在来茶の保全，および中山間地の茶業の発展をすすめるには，在来茶という品種の実態，茶生産の近代化・機械化が行われる前の茶園景観に関する調査，これらの知見に基づいた在来茶園の復元と付加価値化が課題であると考えられる。

補注及び引用文献

1) 鳥屋尾忠之・武田善行・松下繁　(1996)：チャの日本在来種における地理的変異と適応性：野菜・茶業試験場研究報告 B (茶業)　9, 1-29

2)農林水産省　茶をめぐる情勢：農林水産者ホームページ〈https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/cha/pdf/cha_meguji_h2805.pdf〉2016 年 6 月 21 日更新　2020 年 3 月 10 日参照

3) 福岡県企画・地域振興部調査統計課：福岡県統計情報アーカイブホームページ〈https://www.pref.fukuoka.lg.jp/dataweb〉2020 年 3 月 23 日更新　2020 年 6 月 20 日参照

4)荒井歩・植田寛 (2010)：近代以前に形成された茶産業の景観構造：東京農業大学農学集報　54(4)，307-314

5)楊真・下村彰 (2015)：京都府宇治市における明治中期以降茶畑の変異について－寺院茶の歴史を有する茶産地の文化的景観に関する研究－：環境情報科学論文集 29, 49 - 54

6) 木村真也・村上修一(2011) 中山間地域における茶園景観に関する研究：滋賀県東近江市奥永源寺地域について：都市計画論文集 46(3)，151-156

(2020.9.26受付，2021.3.30受理)